

18世紀フランス経験主義における「事実」の理論的地位について

淵田仁（本学社会学研究科ジュニアフェロー）

一般的に、十八世紀フランス哲学は感覚や実験、経験による知に基づいて世界を理解しようとする〈経験主義〉に立脚し、生得観念といった普遍原理から出発する十七世紀の〈合理主義哲学〉に対して反旗を翻した哲学であると理解されている。この歴史的変化は、〈原理から事実へ〉という知的転回、もしくは幾何学的真理から自然学的真理への方向転換、あるいは演繹的方法から帰納的方法へという方法の変化等々、様々な命題として言い表される。このような地殻変動が哲学史のなかで生じたということは周知の事実であるといつてよい。

とはいえ、そもそも経験主義は、経験や実験による事実なるものをいかなるものとして取り扱っていたのか。具体的に言えば、原理ではなく経験的事実に依拠しようとしていた経験主義を標榜する者たちは事実にいかなる理論的地位を与えていたのか。こうした問題関心から本発表では、〈事実fait〉という語に着目する。日常的な意味で言えば、〈事実〉とは生じたこと、成したこと、事件、行為、問題という無数の意味を持つ、いわば〈ありふれた〉言葉である。そして、啓蒙の世紀におけるこの語が有する多層的な意味合いをフィロゾーフのテクストのなかに確認することが本発表の目的である。ただし注意すべきは、我々はこの言葉に何らかの哲学的定義を与えることを目指しているのではない。むしろ、フィロゾーフたちの言語的実践においてこの語がいかに作用しているのか、を提示することが本発表の主眼である。

具体的には、『百科全書』や『トレヴー辞典』における事実の定義問題やコンディヤックの認識論を巡る議論を取り扱う予定である。その作業から啓蒙期の歴史叙述や認識論において事実にいかなる理論的地位が付与されようとしていたのかが明らかになるだろう。